

第 64 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 特賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校 3年

高山英真

課題②

世界の平和のために私たちができることは何か。

副題

なし

私は外国人らしい顔立ちをしている。バイリンガルで、小学生の頃には英検準一級に合格した。英語についての質問があれば友人たちはすぐさま私のもとにやってくる。夏や冬の長期休みの度にイギリスへ行き、そこには私を迎え入れてくれる知り合いもたくさんいる。なぜなら、私はイギリス人と日本人のハーフだからだ。

しかし、「イギリスでの生活は、どんなだったか？」などと聞かれると、私は途端に返答に困ってしまう。理由は、至極単純である。私がイギリスに住んでいたことなど、一度たりともないのだ。考えてみれば、イギリス人と日本人のハーフが、日本生まれ日本育ちであろうと、何もおかしいことはない。にも拘らず、人々は私の外国人らしい外見を一目見て、私は海外に住んでいた帰国子女なのだろうと決めつける。それが人々にとって最も納得のいく「答え」だからである。

思えば、私は幼い頃から、この「外国人らしい」という言葉に違和感を抱いてきた。私はもともと明るい性格で、自分が思ったことを何でもはっきり言う性格の人間だ。そんな私の発言を聞いて、周囲の人はよく、「外国人らしいね」と言う。だが、本当にそうなのだろうか？

私は、日本に生まれ、日本で育った生粋の日本人である。私のこの性格は、私本来のものであって、決して外国人だということに起因するのではないと私は考えている。イギリス人の父も、どちらかと言えば内向的な性格だ。だから、私は「外国人らしい」と言われる度に、自分の個性を否定されているように感じてならない。

「らしさ」の追及は、決して「外国人らしい」という言葉に限ったことではない。「中学生らしい」、「女性らしい」、「長女らしい」など、挙げ出したらキリがないほど、私たちは、日頃、何かしらの「らしさ」を強いられて生活している。人はそれぞれ様々な集団に属している。集団には、日本人や外国人といった大きなものから、学校や家族といった小さなものまである。そもそも、人は一つの集団に属しているわけではなく、多様な集団に所属し、集団の中で常に自分の存在が何であるかを確かめる。一つ一つの集団には、それぞれの「らしさ」が付随している。自分の所属する集団の価値観を相手への判断基準にしたり、自身のアイデンティティの拠り所にしたりする。しかし、集団に依存しすぎるあまり、いつしか個としての「自分らしさ」を見失ってしまうこともあるのではないかと私は危惧している。

なぜ、世界で紛争が絶えないか。それは「らしさ」が弊害になっている部分があるのではないかと考える。人はある国の国民である前に、皆平等な個人だ。これを忘れずにいることで、例え国籍や宗教、文化などが異なる者同士でも、互いに認め合い、共生していくことが可能になる。特に国連という世界中の人々が集まる場では、自分の属する国の色眼鏡で見ず、公平な立場でそれぞれの国の意見を聞くことが大事になってくるだろう。そうして少しずつ偏見を取り除いていくことが少なからず世界の平和に繋がると考える。

私たちが踏み出せる第一歩は、「〇〇らしい」という言葉を使わないことである。そうすることで、今まで集団の「らしさ」に阻まれて見ることのできなかった、その人の「らしさ」が見えてくるはずだ。まずは私が、この第一歩を踏み出したい。私は「外国人らしい」からではなく、「自分らしい」からこうなのだ、と胸を張って言える私でありたい。